

日本の「ジェンダー・バックラッシュ」勢力の

言説とその特性

—性(性別・性の多様性)を中心に—

石橋*

seokhyang70@hotmail.com

Contents

- I. はじめに
- II. 男女二分法と「男らしさ・女らしさ」論
- III. ジェンダーとジェンダーフリー
- IV. おわりに

I. はじめに

すでに筆者は、現代日本社会における「ジェンダー・バックラッシュ」¹⁾の問題が、どれほど深刻な危機状況を迎えているのかについて論じてきた。バックラッシュの影響は過去の問題ではない。今もマイナス点が残っており、決して軽視してはならない大きい問題であることを指摘してきた²⁾。日本の場合は、とりわけ「新しい歴史教科書をつくる会」運動と連動していることに特質があり、そこに運動面のみならず研究面でも抱え込まざるをえない困難性があると指摘できる³⁾。

* 立命館大学 衣笠総合研究機構 客員研究員、現代日本女性史

1) バックラッシュ(backlash/bashing)とは、ジェンダー平等教育/性教育とジェンダー平等の法律・施策がすすむことに対する組織的な批判・反撃のことをいう。ジェンダー平等施策とは、ジェンダー平等社会を構築するための諸政策・施策のこと。

2) 詳しくは、石橋(2012)「日本における地方自治体のジェンダー行政とバックラッシュの流れ—1996年から2009年までの4つの時期を中心に」『日本近代学研究』第36輯、韓国日本近代学会、pp.291-313、石橋(2011)「大阪府A市立B中学校における「性教育バッシング」の事例」『日本近代学研究』第33輯、韓国日本近代学会、pp.395-433を参照されたい。

3) 西尾幹二、藤岡信勝、八木秀次、高橋史朗らは皆「つくる会」の会長・副会長などの幹部であ

1990年代後半以降、ジェンダー論及びフェミニズムに対する歪曲・誇張された言説は、政治的な力で拡大再生産された。しかし、多くの人々は、バックラッシュの勢力がとんでもない主張をしていることを知らない場合が多いようである。また、バックラッシュの言説に関する先行研究を見てみると、見出しやキーワードのような短い文章での紹介が多く、しかも出典が明記されていないものも多かった。従って、バックラッシュ派と言われている反フェミニズム側の人が、どういう文脈で何を根拠にして主張しているのかについて、ある程度の分量の文章を紹介し、その言説を分析する研究が必要であると感じた。

筆者はフェミニスト側の主張が完璧で正しいと主張したいわけではない。当然、ジェンダー論やフェミニズムにも多様なものがあり、中には問題のある言説もあるであろうし、試行錯誤を重ねながら理論と実践を進化させていくべきものといえる。それは、すべての研究分野において言える問題であろう。しかし、各人の人権と自由に立脚しているジェンダー論とフェミニズムの思想が歪曲され悪玉にされ、バックラッシュ派の決めつけと歪曲の影響を受けて、多くの人にジェンダー平等の意義が伝わらないこと、それによって多くの女性のエンパワメントの機会が奪われることを懸念している。

本研究では、バックラッシュ派の政治的な力と言説によって、フェミニズムの「歪曲と悪玉視」が拡大再生産されてきたことを考察したい。そして、それらの言説の特性を明らかにすることが目的である。本論では、性(性別・性の多様性)というカテゴリーを中心に(とくに第Ⅱ章と第Ⅲ章の表題の下)、バックラッシュ派のオピニオンリーダーといえる識者の主張と論調について検討する⁴⁾。このために、まず、フェミニズム側の主張を分かりやすく簡単にまとめて、バックラッシュ派の主張を紹介する。その思想的特性を探り出し、それに解釈を行うとともにフェミニズム側の弱点も指摘したい。

り、「つくる会」にかかわっている者たちが、バックラッシュ派の中核を担っているという関係がある。

4) バックラッシュ派の「中心的組織」と主要な「担い手たち」については、石橋、前掲「日本における地方自治体のジェンダー行政とバックラッシュの流れ」を参照されたい。オピニオンリーダーといえる識者は、主に『産経新聞』に代表されるサンケイ・メディアの紙面によく登場する人物として影響力を持っている。彼らは、フェミニズムが体现している思想を激しく批判している。

なお、あらかじめお断りしておくことがある。本論では、①人物の職位は、引用文献の出版年度当時の職位を示している。②引用文中の下線はすべて筆者による。③言説を分析する道具としてキーワードを引用文の文頭に設定した。具体的に、批判の対象と主張の特性を分析した上で、性(性別・性の多様性)をめぐる言説について、【男女二分法のイデオロギー】【同性愛者嫌悪】【女装家(オカマの授業)】【自己弁護論】【破壊・否定論】【男女平等との分離論】【女性蔑視・詭弁・ルサンチマン視】【陰謀論】というキーワードでまとめた⁵⁾。

Ⅱ. 男女二分法と「男らしさ・女らしさ」論

バックラッシュ言説の主たる論点について井上輝子(2008)は、①生物学・生理学の名を借りた本質主義的性別二分論(生物学的・生理学的本質主義)、②ジェンダー二元論の無条件肯定、③異性愛男性中心主義的セクシュアリティ観の3点に整理できると述べ、これらの三位一体論を「性別二元制イデオロギー」と名づけておくと示している⁶⁾。また、性別二元制イデオロギーの問題点について詳しく分析しているが、その分析の一部を紹介しておく、上記の①に対しては、男女は完全には二分できないし、生物学的性別、生理学的性差、心理学的性差、またジェンダー・アイデンティティは、一貫しているわけではない⁷⁾。②に

5) これらのキーワードは、筆者がこれまでの研究において設定してきたもので、バックラッシュ側に属している識者たちに共通する主張の特質であるともいえる。

6) 井上輝子(2008)「バックラッシュによる性別二元制イデオロギーの再構築」『女性学』Vol.15、日本女性学会、pp.14-22。井上は、「バックラッシュは、国会・自治体でのジェンダーフリー・バッシング、ならびに「過激な性教育」批判、ジェンダーフリー教育批判を中核として展開されてきたが、それだけではない。林道義、西尾幹二、八木秀次ら、バックラッシュ派イデオロギの手になる諸著作…さらには、石原慎太郎都知事「ハベア」発言(2000年)、森元首相「子どもを産まない女性に年金は不要」発言(2002年)、柳沢厚労相「女性は産む機械」発言(2007年)等々のトンデモ発言の続出がある。…バックラッシュ言説の論点を整理し、その問題点を明らかにすることが目的であると記している(同書、p.14)。

7) その例として、「インターセックスやトランスジェンダーの人々のみならず、「男」とされる人々、「女」とされる人々が、すべて遺伝子、性ホルモン、外性器、生理的機能、ジェンダー・アイデンティティが一貫的、等質的に二分されているわけではない」と主張する(前掲、p.17)。

対して、性別分業のあり方は、文化によって、また歴史とともに変化してきている。「男は仕事、女は家事と育児」の性別役割分業は、産業構造が転換した現在の日本社会においては、適合的でない。③の問題点は、人々の性的指向は異性に対してのみ向かうとは限らず、同性に対して性的欲望を感じる人も存在する。現在の社会において、異性愛者が多数だからといって、それ以外の性的指向を持つ人の権利を奪うことは出来ない、などを指摘している。

バックラッシュ派の重要な論点カテゴリーの一つが、男女二分法と「男らしさ・女らしさ」と性別役割分業の肯定論にあることは周知の通りである。そういう言説を具体的に見ていくことにしよう。

【男女二分法のイデオロギー】

ばんぶつふえきこれしぜん いんようのみち
「万物不易之自然陰陽道」で、中国の陰と陽の易学から始まり、天地と万物がそうした二極対立で成り立っています。その自然に逆らって、自然から解放されると「個」が確立するなどは到底言えないはずで、女は女らしく、男は男らしく生きるなかで、「個」の確立を求めていくべきではないかと思えます⁸⁾。

生物一般にとっても、また生物の中の人間種にとっても、二項対立は絶対に必要なものである。生物にとっては雌雄の区別は生き残っていくための優れた戦略であることが解明されている。人間にとっても男性と女性に分業するという方策は、たんに生殖と保育の次元にとどまらず、生活全般にわたって有効な戦略である。…「男らしさ」「女らしさ」の二項対立も、根本的にはこうした生物としての二項対立的な戦略の一環として捉える視点が必要になる⁹⁾。

現実には、「らしさ」から離れた丸裸の「個」などはどこにも存在しません。そう思い込んでいるだけなのです。…うがった見方をすれば、彼らはこれまでの歴史や伝統、秩序や規範を破壊するためにこそ、そのような「らしさ」を否定しようとしているとも言えます¹⁰⁾。

8) 西尾幹二・八木秀次(2005)『新・国民の油断—「ジェンダーフリー」「過激な性教育」が日本を亡ぼす』PHP研究所、p.31。

9) 林道義(1999)『フェミニズムの害毒』草思社、pp.183-184。

10) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』p.37。

男女のあいだには優劣の差なんかない。ただ女性は女性という生理的宿命を背負っており、そこを起点にして考えなくてはならない。男性もまた、男性以外は持っていない生理的宿命を背負って生きているのです¹¹⁾。

以上のように男女二分法と男らしさ・女らしさが、生物学・生理学にもとづいた本質主義的イデオロギーとして構築される言説がその典型である。バックラッシュ派がそれを裏付ける科学的言説として援用しているのが「脳科学」的知識である。これによって、絶対的性差があることを指し示そうとしているが、特に、新井康允の著書をよく引用している。

新井康允氏は『ここまでわかった！女の脳・男の脳』(講談社、一九九四年)の中で、脳科学から見ると男女の行動様式の性差にははつきりと生得的な違いがあることを明らかにしている¹²⁾。

昔から自然と男女の遊びは分かれていますね。脳の構造が男女で違うからだ、というのが最新の脳科学の見解のようですが、その意味で遊びの内容が違ったり、分かれて遊ぶほうが自然なのです¹³⁾。

人間総合科学大学教授・新井康允氏の『脳の性差』(共立出版、平成十一年)という本を見ますと、はつきりと医学的な根拠を持って、男と女の違いは、ホルモンの

11) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』pp.354-355。

12) 林道義(2005)『家族を蔑む人々—フェミニズムへの理論的批判』PHP研究所、p.38。その他、新井康允『男と女の脳をさぐる』(東京図書、1986)と、アラン・ピーズ、バーバラ・ピーズ『話を聞かない男、地図が読めない女』(主婦の友社、2000)をあげて、「空間認知と言語能力」にも男と女では生得的な得意と不得意があることを主張している。しかし、実際には脳科学者の中でもいろいろな意見がある。

これに対して、荻野美穂は次のように反論する。荻野は、最近の研究によれば、脳の構造に男女で違いがあるのは確かなようだが、ただしそれは、「女だから家庭に入って子育てするのが自然」と言い切れるほど、単純なものでも決定的でもないと述べ、デヴィッドの一事例だけから、「すべての人の性自認は、先天的なもの」とは言えず、ジェンダー概念が否定されるわけではない。また、性自認の問題と男らしさ・女らしさの問題とは、分けて考える必要があると主張し、フェミニズムは、マナーの議論だけを根拠にしていたわけでもないと反論する(日本女性学会ジェンダー研究会編(2006)『Q&A男女共同参画/ジェンダーフリー・パッシング』明石書店、pp.33-35)。

13) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』p.60。

分泌によって、生まれつききちんと区別されていると書かれています。…立派な学術書です¹⁴⁾。

マネーの実験が悲惨な結果を招いたことはいまでは広く知られているが、じつは同じ無謀なことをいまも行政や教育の場でフェミニストたちは実践しているのである。日本の男女共同参画行政は子供に対して犯罪を犯していると言わざるをえない¹⁵⁾。

これらと連動させて登場するのが、ジョン・コラピント著『ブレンダと呼ばれた少年』(村井智之訳、無名舎、2000/扶桑社、2005)である¹⁶⁾。「脳の性差」とともに、ジョン・マネー(アメリカの心理学者)の「双子の症例」は、「ジェンダー概念の非科学性」をめぐる言説空間において非常に批判的に利用される。これについて北田暁大の言葉を借りると、「非科学的なジェンダー概念を振り回すことによって、人間の「自然」を破壊し、社会を混乱に陥らせている。そうした像の構築は、反フェミニズムの論者たちにとって、きわめて重要な「戦術」となっている」¹⁷⁾。また、小山エミの調査(2006)によれば、『正論』2003年6月号に「双子の症例」が取り上げられ、2003年から2005年の間、『正論』『世界日報』『SAPIO』を中心に「ジェンダー・パッシング」の論点として掲載されたことがわかる¹⁸⁾。「ブレンダの悲劇」と「双子の症例」をめぐる言説の攻防については、北田暁大の研究報告書(2006)第2章の「(3)科学のレトリック」に詳しく記述されている。

このような男女二分法と男らしさ・女らしさに代表される「本質主義」「生理的宿命」論は、容易に固定的な性別役割分業の肯定と性別特性論に繋げられる。その反面、「性の多様性」については認められないだろうし、これは性的マイノリ

14) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』p.266。

15) 林、前掲『家族を蔑む人々』p.67。

16) 「ブレンダと呼ばれた少年」の悲劇と呼ばれるのは、ジョン・マネーの「性自認形成の後天性」の人体実験をされた少年の物語である。マネーは、論文「双子の症例」(1972)で、その実験が成功したと発表した。

17) 北田暁大他著『戦後日本における「バックラッシュ」的言説の社会的研究』2005年～2006年度の科研研究報告書。

18) 小山エミ(2006)「「ブレンダと呼ばれた少年」をめぐるバックラッシュ言説の迷走」双風舎編集部編『バックラッシュ!』双風舎、pp.284-309。彼らは、「マネーの理論が崩壊したいま、ジェンダー論は全面的に見直されるべきだと主張した」(同書、285)。

ティへの差別へと繋がる論理になっていることが見て取れる。性の多様性の否定は、もちろん「家族の多様性」の否定及び差別にも繋がる問題であろう。ここで指摘しておくべきは、バックラッシュ派には、明言は避けるものの、性的マイノリティへの差別意識、女性蔑視があるという点である。バックラッシュは、単純な女性差別や女嫌いの動きではなく、言葉で表現されていない隠れた「ジェンダー差別」があることが、今日のバックラッシュの大きな特徴である。これを筆者はバックラッシュ派の「自己弁護論」と名付ける。そこを示す点についてみていこう。

【同性愛者嫌悪】

八木：あの曲(引用者注：SMAPの「世界に一つだけの花」)を作った槇原敬之氏は同性愛者ですけれども、あの歌にははっきり思想的背景があるんですよ、ジェンダーフリー、同性愛奨励の歌としてです。現にいま、全国の小学校や幼稚園では組合系の先生たちがこの歌を子供たちに盛んに歌わせています。西尾：人でも国でも、ナンバーワンになろうと努力しなければ、オンリーワンにもなれないんですよ。そういうことが分かっていない悲しい時代の風潮です¹⁹⁾。

【女装家(オカマの授業)】

はなはだしいものでは、「女装家」と称する人物が授業をするケースがあります。「女装家」というのは、本来は男性ですが、女性の格好をしている人です。この人が中学校の教壇、…生徒の前に出て授業をするのです。じつはこの授業が行われる前に、生徒にジェンダーチェックをしています(注：東京・足立区立第十一中学校)。…自分たちと変わらない、決して特殊な人ではないのだという意識を持たせるという仕組みです²⁰⁾。

女装家など、子供が気持ち悪がるのが自然なのに、その子供に気持ち悪がらせないための意識改革までしてから講師として授業をさせるというのは、手が込みすぎているし、やり方が悪辣ですね²¹⁾。

19) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』p.114。

20) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』pp.77-78。

21) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』p.80。

ニューハーフ(いわゆる“オカマ”)が中学校の教壇に立って自分の経験談を語り、「自分のなかの男らしさ、女らしさの意識を払拭しなさい」と教えているケースがあります。たとえば、東京・区立足立十一中学校では「『差異』と『差別』を考えるニューハーフの存在と自分の中の弱者の発見」なる授業が行われ、…「女装家」がゲストとして講師を務めたそうです。第二次性徴期を狙ってそういう教育が行われているんですね。これでは完全に役割モデルが混乱します。…人間としてのアイデンティティを破壊する教育を意識的に行っているんですね²²⁾。

【自己弁護論】

誤解のないように言いますが、私はホモやバイセクシャルを差別すべきだと言っているのではなく、結婚など社会の制度や慣行は男女の関係を前提として成り立っており、同性愛や両性愛をそれを同等としなければならないという主張は過剰な要求だと言っているにすぎません。揚げ足を取る人がいますから、この点、誤解がないように言っておきます²³⁾。

八木秀次は、東京・足立区立第十一中学校の授業実践を上記のように「意識改革」の後に待っているのは“オカマの授業”として取り上げ、批判的に語っている。「女装家」の授業を発案したといわれる藤原和博が、民間人校長として東京・杉並区立和田中学校に就任した²⁴⁾。これに関連して、八木の記述によれば、自分が「女装家」の授業を「正論」のコラムで指摘したため、都教委にずいぶんクレームがあったようであり、地元の杉並区でも反対運動が起こり、校長の辞令が出るのがずいぶん遅れたものの、結局、校長に就任したと言う²⁵⁾。

これらの主張には、同性愛者嫌悪と性的マイノリティへの差別の思想が孕まれているといえる。つまり、人権意識を考える姿勢やジェンダー平等の意識が欠如しているといえる。にもかかわらず、藤原校長就任の事件から読み取れるの

22) 八木秀次編著(2002)『教育黒書—学校はわが子に何を教えているか』PHP研究所、p.234。

23) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』p.302。

24) 藤原和博他著(1998)『人生の教科書【よのなか】』筑摩書房、藤原和博(2001)『世界でいちばん受けたい授業—足立十一中【よのなか】科』小学館、などの著書で授業実践を紹介した。

25) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』p.79。

は、バックラッシュ派の草の根の運動が働きかけていること、および、バックラッシュ派の主張が現実の教育内容や人事にまで及びそうであるという深刻さである。また、自己弁護的に、「差別」ではないと言いつつ、「同等」は過剰な要求だという主張は、論理矛盾に陥っている主張となっている。

Ⅲ. ジェンダーとジェンダーフリー

元来「ジェンダー」は言語学の用語で、名詞を性別化して分類する文法的性別を意味したが、およそ1950年代以来、様々な論者によって定義が与えられ使用されてきた。第二波フェミニズム以降の文脈では、社会的・文化的な性差を示すものとして使われている。

井上は『新・女性学への招待』の中で、男女の役割や傾向性の違いが、生物学的に宿命づけられたものではなく、社会的・文化的に構築されたものであることを明らかにしたアン・オークレーの著書(『セックス、ジェンダー、社会』1972)を紹介する。これ以降、女性学では生物学的・生理学的性差を「セックス」、社会的・文化的性差を「ジェンダー」と呼んで、区別して使用するようになったと述べる。そして井上は、1980年代に入ると、セックスとジェンダーを二分するとならえ方に疑問が出される。つまり、セックス自体が社会的・文化的に構築されたものに気付き、セックスもジェンダーに含まれることになる」と説明する。ここで、ジェンダーを広く「性別や性差に関する知(知識・認識)」と定義することで、社会通念化した男女観の歴史性や思い込みの構造などを分析の俎上に載せることが可能になったと論ずる²⁶⁾。

1990年代以降のフェミニズム論壇において「セックス」と「ジェンダー」の構築性のことで盛んに議論された代表的な研究としては、①ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』(竹村和子訳、青土社、1999)²⁷⁾と、②ジョン・W. ス

26) 井上輝子(2011)『新・女性学への招待』有斐閣、pp.16-17。

27) Butler, Judith(1990)*GENDER TROUBLE : Feminism and the Subversion of Identity*. New York : Routledge. バトラーは徹底的な構築主義の立場に立って、セックス

コット『ジェンダーと歴史学』(荻野美穂訳、平凡社、2004)²⁸⁾があり、日本では③江原由美子『ジェンダー秩序』(勁草書房、2001)²⁹⁾が挙げられる。こうしたジェンダーをめぐる秩序が、異性愛(男女の二分法)という制度と密接不可分にあることや、性の構築性について、再考・再論されるようになった。

「ジェンダーフリー」は、日本の学校現場で「性別特性論型の男女平等教育」と区別する必要性から使われ、広まった言葉であると同時に、日本の運動の中で性差別解消・ジェンダー平等運動の前進に有効な概念として使用され、広がった概念であるといえる³⁰⁾。フェミニズム側においても「ジェンダーフリー」をめぐる賛否両論はあったが、筆者はこの概念は決して曖昧でも難しいものでもなく、「ジェンダーの抑圧・偏見から自由になる」とことと理解すればいいと考える。具体的に、男も女も一人ひとりが個性に従ってのびのびと生きられるようにするという意味で、これを伊田広行は「個々人としてその違い・多様性を尊重していく概念(個人単位の平等論)」だと表現する。

しかし、2000年代以後、バックラッシュ派によって「ジェンダーフリー」に対す

／ジェンダー／セクシュアリティの構成だけでなく、身体の構成も本質的に決定されるよりも文化的に構成されると考える。「セックス」と呼ばれるこの構築物こそ、ジェンダーと同様に、社会的に構築されたものである」と言う。また「セックスは、つねにすでにジェンダーなのだ」と言明する(翻訳書、pp.28-29)。

28) Scott, Joan Wallach(1999)*Gender and the Politics of History*. New York: Columbia University Press. スコットは、ジェンダーを「肉体的差異に意味を付与する知」と定義し、「あらゆる社会関係の場に存在して、人間が世界を認識し、構築する際の基本概念の一つとして機能している」と述べる。そしてそこでジェンダーと権力は不可分のものとして出現する(翻訳書、pp.448-449参照)。

29) 江原は「ジェンダー秩序」とは、「男らしさ」「女らしさ」という意味でのジェンダーと、男女間の権力関係である「性支配」を、同時に産出していく社会的実践のパターンを意味すると述べ、ジェンダーと「性支配」が、ジェンダー秩序に沿った社会的実践の持続によって、同時に、社会的に構築されると考える。また、ジェンダーは、それ自体、権力を内包している可能性があるかと捉える。江原によれば、「男」「女」という「ジェンダー化された主体」が最初にあって、その両者の間で「支配—被支配」の関係がうまれるのではなく、「男」「女」として「ジェンダー化」されること自体が、権力を内包している可能性がある。つまり、ジェンダーと性支配は、同時に形成されるのかもしれないと論ずる(同書、p. i、p.25)。

30) 前掲「Q&A男女共同参画／ジェンダーフリー・パッシング」p.169参照、一部引用。色々な概念の定義については、井上輝子他編『岩波 女性学事典』(岩波書店、2002)を参照のこと。ジェンダー平等とは、既存の性別特性論の上での男女平等を超えた概念であり、女性の問題だけでなく、男性の解放や性的マイノリティーの問題も視野に入れている。つまり、男女平等を発展させた概念である。

る集中的攻撃が激しくなった。「バックラッシュ」言説によって「ジェンダーフリー」は最大の標的として取り上げられた。上記のようなフェミニストが使った意味をゆがめて宣伝して、攻撃対象としやすかったのである。これに関連して、前述の北田暁大の報告書では、バックラッシュ派は単に、フェミニズムへの違和感や批判意識を提示したのではなく、「ジェンダーフリー」「フェミニズム」を看過しえない社会問題として認知する枠組みを提示し、「社会問題としてのジェンダーフリー」構築過程は、一定の成果へと結実した「社会運動」であったと指摘している。それは、筆者も「バックラッシュの流れ」で検討した通りである。ではどのように、フェミニストの使った意味をゆがめて社会運動として反フェミニズムの機運にまで高めたのか。その言説の特性について見ていくことにする。

【破壊・否定論】

ジェンダーフリーを提唱して、日本の文化を破壊しようとしている³¹⁾。

いびつな女権拡大は日本の伝統文化を破壊する「白い文化大革命」だ³²⁾。

結局は、「男らしさ」「女らしさ」を否定し、「男性だから外で働く」「女性だから家事をする」といった性別役割分担を全否定します³³⁾。

「ジェンダー」とは「社会的文化的に作られた性差」という意味である。この性差をなくしてしまおうというのが、フェミニストの理想としている「ジェンダー・フリー」の考え方である。なぜなくすべきかというと、現在の男性中心社会では、ジェンダーは男性に都合よく、女性には不利益に作られているからだというのである³⁴⁾。

31) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』p.188。

32) 米田建三(2006)「いびつな女権拡大は日本の伝統文化を破壊する「白い文化大革命」だ」『SAPIO』5月10日号、p.76。

33) 桜井裕子(2005)「セックス・アニマル育てる性器・性交教育の実態」『正論』11月号、p.329。桜井(1957年)は、PHP研究所、PHPエディターズグループ勤務を経て、フリーのジャーナリスト。

34) 林、前掲『フェミニズムの害毒』p.176。

現在の反ジェンダーフリーと言われる人たちは、ジェンダーフリー運動家の実態が性差別撤廃という理念からはずれて、丸ごとの性差否定にまで暴走していることに対して批判しているのである³⁵⁾。

フェミニズムでいう「ジェンダー」概念は、「男女のあらゆる性差を認めない」、つまり政府が公式用語として問題があると認めている「ジェンダーフリー」の概念を必然的に導くものである。本質的に、性差否定のための概念なのである³⁶⁾。

山谷えり子参議院議員の参議院外交防衛委員会での質問のほか、六月十四日に行われた自民党の「内閣部会」「女性に関する特別委員会(野田聖子委員長)」「男女共同参画推進協議会(古賀誠会長)」「過激な性教育・ジェンダーフリー教育実態調査プロジェクトチーム(安倍晋三会長)」の合同会議でも、出席議員から「ジェンダー」概念に基づく男女共同参画行政への批判が相次いだという。関係者によれば、…「ジェンダーは…フェミニズムを信奉している人だけが認知している言葉。これを認知しておくべき。使わないようにしなければならぬ」(西川京子衆議院議員)³⁷⁾。

「ジェンダーフリー」という用語を使わないということだけでは、フェミニズムイデオロギーを政府が否認することを意味せず、全く無意味である。「ジェンダーフリー」がだめなら「ジェンダーに敏感な視点」や「ジェンダー平等」、それでもだめなら「男女共同参画に敏感な視点」「男女共同参画社会の実現」と言い換えるだけであろう。「ジェンダー」概念(フェミニズム革命の基礎概念)そのものを放棄しなければ事態は何ら変わらない³⁸⁾。

バックラッシュ派による「ジェンダー」と「ジェンダーフリー」をめぐる最大の論点は、性差の否定・解消、男らしさ・女らしさ(男女の特性)を否定し、日本の伝統や文化を破壊するという主張である。この「破壊・崩壊・否定」論は、既存の秩序と規範、伝統と文化、家族と家庭、国家などの言葉の後ろに「…の破壊・崩

35) 林、前掲「家族を蔑む人々」p.136。

36) 光原正(2005)「男女共同参画」その欺瞞の系譜とレトリック、「正論」9月号、p.250。光原(1940年)は、1966年東大経済学部卒業、郵政省入省後1993年退官、元TVQ九州放送北九州本社代表、教育を考える会会員。

37) 光原、前掲「男女共同参画」その欺瞞の系譜とレトリック、pp.250-251。

38) 光原、前掲「男女共同参画」その欺瞞の系譜とレトリック、p.256。

壊・否定」という言葉を付けて、ジェンダー論だけでなく、フェミニズムの思想全体にマイナス的イメージを与えて、理論と実践を過度に単純化(歪曲)させ、まるで社会の「悪玉」のように仕立て上げる重要な戦略として有効に使われることになる。

上記のジェンダー概念の廃止論はフェミニズム全体を批判している点、および社会の破壊に対抗するという構図に持ち込む点に特徴がある。

ジェンダー論者が単純に、ジェンダーフリーは「性差否定」ではなく、「性差別の解消」であるといくら主張しても、彼らは聞く耳を持たない、或いは認めたくない立場であろう。この性差否定は根本的に誤った認識、あるいは意図的に歪曲した認識であるにもかかわらず、この言説によって、以下のように男女平等との分離論を作り上げていった。性差否定はありえないことであり、フェミニストは多様性の尊重を求めているが、徹底してゆがめて論じるのである。

【男女平等との分離論】

「男女平等」や「性差別の解消」を否定する立場にはありません。…しかし、「男女共同参画」や「ジェンダーフリー」には異議があります。…すなわち「男女平等」ないし「性差別の解消」と、「男女共同参画」ないし「ジェンダーフリー」とがまったく別物だからです。…一言で言えば「性差の解消」、あるいは「性差の否定」ということができます³⁹⁾。

社会の中で男女が平等に参加し協力し合っていくことは、たいへんすばらしいことであり、それ自体に反対する理由はなにもない。しかしその場合に問題になるのは、「男女共同参画社会」ということの中に、つねに「ジェンダー・フリー」という主張が交じってくることである。フェミニストの大半は、この二つを同一視している。しかし、これらはまったく異なるものである⁴⁰⁾。

【女性蔑視・詭弁・ルサンチマン視】

人間の幸福は男が女を愛し、女が男を愛するということで成り立っていて、これは万古不易です。ジェンダーフリーの思想は、女としての幸福が得られない女の主

39) 西尾・八木、前掲「新・国民の油断」p.38。

40) 林、前掲「フェミニズムの害毒」p.176。

張なのです。…ジェンダーフリーの思想は、社会的正義に名を借りて、いわば、平均から逸れた人が男らしい男や女らしい女を否定しようとする心理から発しているもので、これは新しい差別になります⁴¹⁾。

ジェンダーフリーの思想は、美しい女性に対する嫉妬の体系から生まれた反乱だと思えます。とても歪んだものです。…ジェンダーフリーは性差がないということで、真ん中、いわば中性化しようとする中で、女の優越者、男の優越者を排除しようとする思想だと私には思える。これはある意味で、新しい差別の構造を作ろうとしているのです。非常に非人間的な、人の自由を侵害する、いままでの社会の常識で作られた自由を奪うことを目的としているのではないかと⁴²⁾。

日常生活でも魅力的な女性はいじめの対象なのです。…女は女をいじめるし、差別します。とくに魅力的な女性は差別の対象で、女性社会から差別されています。…一般社会で、美醜が女性の価値を決めているのは動かし難い現実です。…そうであるからこそ、美しい女性は女性らしくすればするほどいじめられるのです⁴³⁾。

このような女性蔑視の思想と詭弁、ルサンチマン視はあまりにも低レベルなものであるため、学術的には検討に値しないともいえる。しかしながら、とんでもない詭弁であっても分かりやすい言葉で説明している点から、むしろフェミニズムに無関心な人やなんとなくフェミニズムがいやだと思う人を、まるでそうであるかのように引き付けた可能性があったのではないだろうか。多くの人が美しさなどへのあこがれ、羨望を持っており、内心には少しのねたみ意識も持っている。そこに付け込んで、フェミニズムを叫ぶ女性は、美しい女性への恨みや妬みで行動しているのだというのは、そうはありたくないという人々の意識と重なって広く受け入れられる特性を持っていると言える。また特に男性には、美しい女性を評価することを肯定したいがゆえに、上記のようなルサンチマン理解がわかりやすく、自分への反省もしなくて済むので受容しやすかったと言えよう。

41) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』pp.42-43。

42) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』p.44。

43) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』p.43-44。

彼らがジェンダーを目の敵にする理由について加納実紀代の分析によれば、「ジェンダーを導入することによって、彼らが死守したい男性中心社会が根源から揺るがされる。そのことを彼らなりに学んだのではないか。とくにナショナリズムにとって、ジェンダーは非常に脅威を与えるものだということに彼らは気づいた」からであるという⁴⁴⁾。体制にとっての危険性を認識している彼らの危機意識を、次の高橋史朗の論法によって見ておくこととしよう。

固定的な「性的役割分担意識」を破壊し、男女の「結果の平等」を妨げる一切の制度、慣行を打破するために意図的に作られた概念にほかならない。この強力な破壊力をもった「ジェンダー」という概念が、男性が女性を支配し女性が抑圧される「権力装置」「抑圧システム」として、男女の関係を支配—被支配、権力—抑圧の敵対関係として固定的にマイナス的に捉えていることが最大の問題点といえる⁴⁵⁾。

以上の言葉の選択(特に下線)から見えてくるものは、「批判・改善・変革」と「破壊・崩壊」は言葉のニュアンスが違うにもかかわらず、意識的に言い換えている点、および、フェミニズムの主張が危険であると印象付ける特性がある点である。フェミニストが男性中心社会システムと性に関わる権力関係を批判し改善を求めてきたことに対して、男女関係を敵対関係として捉えた、それはルサンチマンだと解釈(曲解)する論法が、多くの人の「誤解」あるいは時には「納得」を招いたと判断できる。言い換えれば、そうした議論の枠組み設定が大衆操作としては巧妙であったがゆえに、多くの人が説得されたと考えられる。また、男女を対立関係のみでとらえているかのように見えてしまったことは、フェミニズム側の弱点であったともいえる。フェミニストの皆がそう言っていたわけではないが、一部に単純化し、男女二分法にのって男性批判だけを言っているかのようにみられる言説が多かった事実があり、バックラッシュに果敢に反論することを避けたり、十分にうまく反論しきれなかった点がフェミニズム側の問題であった。

44) 加納実紀代(2005)「『つくる会』歴史教科書とジェンダー」『インパクション』147号、インパクト出版会、p.45。

45) 高橋史朗(2003)「『家族解体』『伝統破壊』へと暴走する自治体」『正論』7月号、p.280。

【陰謀論】

こういう思想が出てきた理由を考えると、男女の平均から逸れたために嫌な思いをしている人がたしかにいるということです。…それが社会的復讐心になってマルクス主義と結びつき、平等—不平等、支配—被支配という感情が生まれます(46)。

ジェンダーフリーは白色革命

…暴力革命を「赤い革命」と呼ぶならば、こっちは「白い革命」と名づける人もいます。つまり、表面的には異様なまでに個人の自由や意思を尊重するような言葉を並べます。たとえば「性の自己決定権」とか、「個」ということを言いますね。…ところが実態は、あらゆる伝統や観念を敵と見なして破壊しようとする狙いを秘めている…(47)。

ジェンダーフリーの原点は連合赤軍

…一九七〇年代…全共闘運動の行き着く果てに「連合赤軍」事件がありますが、連合赤軍の思想とジェンダーフリーの発想とは驚くほど似ており、「そのまま、そっくり」とまで言えるものです。というより、ジェンダーフリーは連合赤軍の思想そのものなのです(48)。

後ろ盾と活動の場を失った冷戦後の左翼は、大挙してフェミニズムに活動の場を見出した。とくに共産党系とクリスチャン左派は癒着しつつフェミニズム運動になだれ込んでいる。彼らの最大の狙いは家族を空洞化させ、破壊することである。…女性を家事・育児から「解放」し、男も女も国民全員を労働者化し、家庭を分解して全国民を「社会化」する。フェミニストたちが目指しているのは、まさしく共産主義社会である(49)。

フェミニストの背後には必ずと言っていいほどに、クリスチャンと共産党と朝鮮勢力の影がちらついている。というより、クリスチャンと共産党と朝鮮勢力とフェミニストは相互にダブっており、密接に協力し合っているのである(50)。

46) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』p.43。

47) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』pp.186-187。

48) 西尾・八木、前掲『新・国民の油断』p.195。

49) 林、前掲『家族を蔑む人々』p.1。

日本人の感情を逆撫^{さかな}でする乱暴なやり口は、いまやフェミニストの中に北朝鮮勢力が広く深く浸透していることを暗示している。このことをわれわれは深刻に受け止めておかなければならない。今後悪性フェミニズムと戦うときには、北朝鮮工作との戦いでもありうることを覚悟しておかなければならない⁵¹⁾。

中條：ジェンダーフリーやジェンダー論は、共産主義を土台にしている⁵²⁾。

山谷：PTも毎週集まって、メンバーで「家族、私有財産、及び国家の起源」から読み直して、「ジェンダー論」の家族観・男女観は、まさにエンゲルスの共産主義、階級闘争史観に基づいたものだということを勉強しました⁵³⁾。

ジェンダーフリー思想(男女の区別の否定)は、…マルクス、エンゲルスを経て、レーニンがロシア革命時に「性と女性の解放」をスローガンに掲げて政策として採用します。家族制度の廃止を呼びかけ、家事労働や保育を共同化し、墮胎を奨励したことから、実質的にフリーセックスになり五百万人の私生児が誕生して、非行少年が増加して社会が大混乱します。結局は、社会主義の実験でもフリーセックスは成功せず、スターリンの登場で、こうした実験は終止符が打たれます⁵⁴⁾。

ジェンダーフリーとは、初期の共産主義社会で行われた、しかも大失敗した実験を、現代の日本で再現しようとする試みなのである。こんな思想が支持されたのは、70年安保の全共闘世代が、今や省庁や大学などで指導的な立場に立つようになったからだと考えられる⁵⁵⁾。

【自己弁護論】

山谷：自民党のPTは女性を家庭に押し込めておくような封建的で時代錯誤の

50) 林、前掲『家族を蔑む人々』p.137。

51) 林、前掲『家族を蔑む人々』p.140。

52) 山谷えり子・中条高德(2005)【対談】『男女共同参画の欺瞞と驚愕の性教育』『正論』10月号、p.256。当時、中条高德は日本国際青年文化協会会長、山谷えり子は自民党参議院議員。

53) 山谷・中条、前掲『男女共同参画の欺瞞と驚愕の性教育』p.258。PTの正式名称は「過激な性教育・ジェンダーフリー教育実態調査プロジェクトチーム」(安倍晋三・座長、山谷えり子・事務局長)。

54) 桜井、前掲『セックス・アニマル育てる性器・性交教育の実態』p.329。

55) 八木秀次(2005)『小学生に「セックス!」と連呼させコンドーム装着実習までやらせる仰天現場』『SAPIO』3月23日号、p.97。

運動をしているという根も葉もない中傷を、いわゆる女性運動団体の人たちが経済団体、経営者の人たちに言って回っているという話も聞いています。私たちは女性の社会進出には賛成ですし、謂われなき待遇差別はなくさなければならぬと思っています。町づくりにも女性にもっと参加の場を与え、育児支援も推進すべきだと考えています。ただ、ジェンダーフリー、あるいはそれと同義のジェンダー論にもとづいた教育と過激な性教育、あるいは政策展開はやめてほしいと言っているだけなんです⁵⁶⁾。

これらは、ジェンダーフリーやフェミニズムを、マルクス主義、共産主義、連合赤軍、左翼、北朝鮮勢力などへつなげ、その両者の「思想的」な親和性を指し示そうとする手法である。つまり、否定すべき社会の「悪玉」だと印象付ける意図があるといえる。以上みてきた「陰謀論」を先述の「破壊・否定」論と結びつけて、多くの人々の中にある左翼・共産主義・北朝鮮などへの恐怖感や敵意を動員し、ジェンダーフリーやフェミニズムを、伝統ある社会を破壊する、怖い、とんでもない思想だと思わせる効果を生み出そうとしたのである。これについて小谷真理の言葉を借りると、「フェミニストたちが何かしらの謀略をたくらむ存在であると展開するところで、そのひとつの証左として、背後に共産主義者の影響を匂わせるくだりである。…きっと「共産主義」がうしろにいて、彼女たちをあやつっているのだ⁵⁷⁾、というように見せ掛けている。

東京都荒川区の男女共同参画社会懇談会(会長・林道義)の『報告書』に対する当時の攻防は、双方の熱い議論のため、注目を集めた事件である⁵⁸⁾。当時の

56) 山谷・中条、前掲「男女共同参画の欺瞞と驚愕の性教育」p.256。

57) 小谷真理(2006)「テクハラとしてのバックラッシュ」前掲『バックラッシュ!』p.187。

58) 荒川区「男女共同参画社会基本条例案」は、騒動の末、2004年7月1日の区議会本会議で撤回された。同懇談会の会長・林道義、副会長・高橋史朗、委員の一人が八木秀次(委員は17人)で、三人の人選に関わったとされる高橋祥三助役は「つくる会」協力者だという(委員は公募の区民3人以外は区の人選)。これについては、張学鍊(2005)「インタビュー：荒川区条例問題にみるバッシングの実相」『世界』4月号、pp.106-109や、長岡義幸(2004)「ジェンダーフリー叩きと荒川区条例案撤回騒動」月刊『創』9・10月号、pp.102-109や、『論座』2005年3月号「ジェンダーフリーたたきの深層」記事の中で、北田暁大「近代的家族の相対化への不安が根っこにある」pp.172-181と高橋純子「なぜ区長は条例案を撤回したのか」pp.182-189と八木秀次「一部の特殊な人たちの考えが基本法になってしまった」pp.194-197を参照のこと。張学鍊(チャン・ハンニョン)は弁護士会で「外国人の権利に関する委員会」「両性の平等に関する委員会」「犯罪被害者

バックラッシュ側は、まるで「痛いところをつかれての逆上」したかのような反応を見せた。この事件に関連して、林道義はクリスチャンと関わりのある組織として『共同通信』『信濃毎日新聞』『若手日報』を挙げており、反対意見書を出した「国際婦人年連絡会」代表の江尻美穂子(津田塾大学名誉教授、日本YWCA理事長)をサヨクとクリスチャンの共闘組織の「女性九条の会」の指導者であると指摘し、同懇談会から抗議の意思表示として辞任した張學鍊弁護士を、在日朝鮮人で、朝鮮人学校の大学受験資格取得や在日外国人参政権取得でも北朝鮮の代弁者の役割をしている人物として紹介した⁵⁹⁾。

山谷の自己正当化論から浮き彫りになる点は、「女性の社会進出は賛成だが、ジェンダー論に基づいた政策展開はやめてほしい」という「無理やりの分離」であること、同時にジェンダー論と女性政策についての理解不足からくる発想であることである。また、「女性の社会進出は賛成だが」とか「言っているだけ」の記述からは政治的な力で、社会問題として拡大再生産したバッシング問題の行為を、穏便で冷静でまともでつつましやかな主張と見せようとする、縮小化させる意図が見られる。

以上、性(性別・性の多様性)をめぐる言説について検討してきた。ここで問題視すべきことについて簡単に触れておきたい。これらの問題について考えざるを得ない示唆性を与えてくれる井上の分析を紹介しておこう。

性別二元制イデオロギーは、個々人の自由・平等・人権よりは、家族・共同体・国家の秩序の維持を第一に考える家族主義・共同体主義・国家主義に連動しやすい。事実、数年来のバックラッシュ派の発言の端々には、戦前のイ工制度に繋がる家族主義と国家主義との癒着が垣間見られる。…性別二元制イデオロギーは、単に一部の熱狂的反動主義者の挑発にとどまらず、政府の政策や立法の根拠付けとして採用されつつある。…性別二元制秩序が再構築されつつある事態となっている⁶⁰⁾。

支援委員会」などの活動に携わった。

59) 林、前掲『家族を蔑む人々』p.137。

60) 井上、前掲『バックラッシュによる性別二元制イデオロギーの再構築』pp.20-21。

ジェンダー平等論者は、英語で「gender equality」を主張してきたが、「gender less」を主張したことはない。すなわち、「性差否定」「完全に男女の差をなくす」という意味でのジェンダーをなくす」という場合は「gender less」の意味に当たる。性差否定の主張は、バックラッシュ派がフェミニズムの思想を攻撃する名分(戦略)として意図的・非意図的に死守したいものであろう。フェミニズムを客観的に伝えるならば、性差否定ではなく、「性差別否定」であるが、バックラッシュ派はそこを意図的に混同、同一視する。

これだけ大規模で影響力の大きい攻撃がなされているにもかかわらず、フェミニストの内部でジェンダーフリー概念をめぐる賛反両論の論争があった時期に、多くの日本のフェミニストは、ジェンダーフリー攻撃を含んだ「ジェンダー・バックラッシュ」の動きに対する問題の深刻さと危機意識をあまり感じていなかったのではないかと筆者には受止められた。その結果、ジェンダー平等を理解しない人々による用語禁止の圧力があつたとき、積極的に抵抗しないことによって、思想統制に加担するような傾向が一部見られたことは否定できない弱点であろう。また、2006年前後にバックラッシュに対抗する単行本が出版される前までは、ジェンダー、ジェンダーフリー概念の理解と整理をめぐる混乱があつたことが浮き彫りになり、それ(曖昧さ)が批判にさらされたことはすでに指摘した点である。

一方、陰謀論の中には、マルクス主義・共産主義とフェミニズム(男女共同参画・ジェンダーフリー)を結び付けてレッテルを貼る手法が多く見られた。しかし、こうした陰謀は客観的には存在しない。フェミニズムは、過去の社会主義などの人権に関わる思想の影響を受けているが、直接つながっていないと言われる。しかも、マルクスは様々な領域に多様な影響を与えたことは事実であるが、マルクス主義と定義づけようとするバックラッシュ派の論理自体に矛盾があると指摘できる。自己弁護論の中で、バックラッシュ派が主張する「男女平等」とは、性別特性論に基づいた「男女の役割は異なるが平等」が基本原理であるため、現代のフェミニストが主張している男女平等・ジェンダー平等とは基本的に意味が違うことに留意すべきである。

IV. おわりに

バックラッシュ言説の中で、性(性別・性の多様性)をめぐる主たる論点とその特性について検討してみた。

まず、男女二分法と「男らしさ・女らしさ」論においては、生物学・生理学にもとづいた本質主義的イデオロギーとして構築される言説がその典型であった。この「本質主義」「生理的宿命」論は、固定的性別役割分業と性別特性論の肯定に繋がる論法である。したがって、「性の多様性」は認められず、これは同性愛者嫌悪と性的マイノリティ、多様な家族と生き方に対する差別の思想を孕んでいることが見て取れる。

バックラッシュ派による「ジェンダー」と「ジェンダーフリー」をめぐる最大の論点は、性差否定、男らしさ・女らしさ(男女の特性)を否定し、日本の伝統や文化を破壊するという主張である。この「破壊・崩壊・否定」論は、既存の秩序と規範、伝統と文化、家族と家庭、国家などの言葉の後ろに「破壊・崩壊・否定」の語を付けて、ジェンダー論だけでなく、フェミニズムの思想全体にマイナス的イメージを与える。そしてそれが、フェミニズムの実践を過度に単純化(歪曲)させ、まるで社会の「悪玉」のように仕立て上げる重要な戦略として有効に使われた。「ジェンダーフリー」は、性差否定ではなく、性差別解消と個々人の自由の拡大を目指す概念であり、フェミニストは人権と多様性の尊重を求めているものであるが、そこは歪曲されて利用された。

社会問題として「悪玉視」するもう一つの大きな特徴は、陰謀論の主張である。フェミニズム(男女共同参画やジェンダーフリー)をマルクス主義、共産主義、連合赤軍、左翼、北朝鮮勢力などと結び付けて、その「思想的」な親和性を指し示そうとする手法であり、ネットや雑誌などでは「フェミナチ」というレッテルまでもが張られた。

本論で検討したように、特に教育現場で、長年積み重ねられてきた教師や市民の運動と理論の成果が、バックラッシュ派によって、あまりにも単純化され、排除されようとする動きが見られたが、このことは深刻に受け止めなければなら

ない問題であると考える。

一方、フェミニストの内部で、ジェンダーフリー概念をめぐる多様な意見の論争はあってもいいのだが、当時(2000年代の初め頃)、「ジェンダー・バックラッシュ」に対する重大な意味や巻き返しの力に気付いていたのならば、バックラッシュに対抗できる戦略へと議論を盛り上げ、行動に移していくべきであったし、同時にフェミニストは連携の上で直ちに對抗運動を起こすべきであった。だが現実には、その運動はすぐには起こらず、遅れてしまった。フェミニスト側がバックラッシュの動き(巻き返しの力)を軽視・静観したり、或いは、個人攻撃を恐れしたりした面があったといえる⁶¹⁾。大阪府豊中市男女共同参画推進センター初代館長・三井マリ子の解雇問題でも、行政の男女共同参画にかかわり続けたいがゆえに協力しない立場を選んだものまでいたのは事実である⁶²⁾。一部にはフェミニストであるにもかかわらず、ジェンダー・フリー概念には賛成でないと言い出すものまで出た。時局を見誤った典型的な態度であった。これもバックラッシュの動きが加速化された原因の一つになったと考えられる。

現在の日本社会においては、右翼・保守運動に対抗できるようなメディアが弱くなっている点や、労働分野と研究分野における市民運動の力も弱くなっている点があるように見受けられる。2000年代に入ってから保守論壇では、『産経新聞』『正論』『SAPIO』『諸君!』といった大手保守系メディア、『日本時事評論』『世界日報』などの宗教系メディアを中心に、積極的なフェミニズム批判が展開されていった。保守論壇によるフェミニズム(男女共同参画やジェンダーフリー)への攻撃は、実態と掛け離れた流言が多かったが、それが広がっていった。日本軍「慰安婦」問題への攻撃はその一例であった。保守運動とフェミニズム運動の対立は、両方とも相手を「敵」として捉えるだけで、議論や対話を重ねていく点で

61) これに関連して、木村涼子編(2005)『ジェンダー・フリー・トラブル』白沢社、浅井春夫他著(2006)『ジェンダー／セクシュアリティの教育を創る』明石書店、若菜みどり他編著(2006)『「ジェンダー」の危機を超える!』青弓社、伊藤公雄(2006)『ジェンダー・フリー・ポリティクスのただ中で』『インパクト』154号、インパクト出版会、山口智美・斉藤正美・荻上チキ(2012)『社会運動の戸惑い』勁草書房を参照されたい。

62) 三井マリ子・浅倉むつ子編著(2012)『バックラッシュの生贄—フェミニスト館長解雇事件』旬報社、などを参照した。

は弱かったと言えるが、中立主義的に発言すればいいというものでもない。

今後の研究として、引き続き、教育と行政現場というカテゴリーの面で、どのようなバックラッシュ言説がなされたのかという点を掘り起こし記録していくことと、その主張の論理構造を検討していくことが必要であろう。また、バックラッシュ言説を総合的に分析して、気づかれていないその問題性を明らかにしていくことも課題といえよう。筆者はその他の分野でもバックラッシュ言説を分析しているが、紙幅の関係で、ここでは本論の範囲でバックラッシュ言説を分析するにとどまっている。

참고문헌

- 浅井春夫他著(2006)『ジェンダー/セクシュアリティの教育を創る』明石書店.
- 伊藤公雄(2006)『ジェンダー・フリー・ポリティクスのただ中で』『インパクション』154号, インパクト出版会.
- 井上輝子(2011)『新・女性学への招待』有斐閣, pp.16-17.
- 井上輝子(2008)『バックラッシュによる性別二元制イデオロギーの再構築』『女性学』Vol.15, 日本女性学会, pp.14-22.
- 井上輝子他編(2002)『岩波 女性学事典』岩波書店.
- 江原由美子(2001)『ジェンダー秩序』勁草書房, p. i, p.25.
- 小谷真理(2006)『テクハラとしてのバックラッシュ』双風舎編集部編『バックラッシュ!』双風舎, p.187.
- 加納実紀代(2005)『「つくる会」歴史教科書とジェンダー』『インパクション』147号, インパクト出版会, p.45.
- 北田暁大他著(2006)『戦後日本における「バックラッシュ」的言説の社会的研究』2005年~2006年度の科研研究報告書.
- 北田暁大(2005)『近代的家族の相対化への不安が根っこにある』『論座』3月号, pp.172-181.
- 木村涼子編(2005)『ジェンダー・フリー・トラブル』白沢社.
- 小山エミ(2006)『「ブレンダと呼ばれた少年」をめぐるバックラッシュ言説の迷走』双風舎編集部編『バックラッシュ!』双風舎, pp.284-309.
- 桜井裕子(2005)『セックス・アニマル育てる性器・性交教育の実態』『正論』11月号, p.329.
- ジョン・コラピント『ブレンダと呼ばれた少年』村井智之訳, 扶桑社, 2005.
- 石橋(2012)『日本における地方自治体のジェンダー行政とバックラッシュの流れ—1996年から2009年までの4つの時期を中心に』『日本近代学研究』第36輯, 韓国日本近代学会, pp.291-313.
- 石橋(2011)『大阪府A市立B中学校における「性教育バッシング」の事例』『日本近代学研究』第33輯, 韓国日本近代学会, pp.395-433.
- 高橋史朗(2003)『「家族解体」「伝統破壊」へと暴走する自治体』『正論』7月号, p.280.
- 高橋純子(2005)『なぜ区長は条例案を撤回したのか』『論座』3月号, pp.182-189.
- 張学鍊(2005)『インタビュー: 荒川区条例問題にみるバッシングの実相』『世界』4月号, pp.106-109.
- 長岡義幸(2004)『ジェンダーフリー叩きと荒川区条例案撤回騒動』月刊『創』9・10月号, pp.102-109.
- 西尾幹二・八木秀次(2005)『新・国民の油断—「ジェンダーフリー」「過激な性教育」が日本を亡ぼす』PHP研究所.
- 日本女性学会ジェンダー研究会編(2006)『Q&A男女共同参画/ジェンダーフリー・バク

- シング』明石書店, pp.33-35, p.169.
- 林道義(2005)『家族を蔑む人々—フェミニズムへの理論的批判』PHP研究所.
- 林道義(1999)『フェミニズムの害毒』草思社, p.176, pp.183-184.
- 藤原和博(2001)『世界でいちばん受けたい授業—足立十一中【よのなか】科』小学館.
- 藤原和博他著(1998)『人生の教科書【よのなか】』筑摩書房.
- 三井マリ子・浅倉むつ子編著(2012)『バックラッシュの生贄—フェミニスト館長解雇事件』旬報社.
- 光原正(2005)『「男女共同参画」その欺瞞の系譜とレトリック』『正論』9月号, pp.250-251, p.256.
- 八木秀次(2005)『小学生に「セックス!」と連呼させコンドーム装着実習までやらせる仰天現場』『SAPIO』3月23日号, p.97.
- 八木秀次(2005)『一部の特殊な人たちの考えが基本法になってしまった』『論座』3月号, pp.194-197.
- 八木秀次編著(2002)『教育黒書—学校はわが子に何を教えているか』PHP研究所, p.234.
- 山口智美・斎藤正美・荻上チキ(2012)『社会運動の戸惑い』勁草書房.
- 山谷えり子・中条高德(2005)【対談】『男女共同参画の欺瞞と驚愕の性教育』『正論』10月号, p.256, p.258.
- 米田建三(2006)『いびつな女権拡大は日本の伝統文化を破壊する「白い文化大革命」だ』『SAPIO』5月10日号, p.76.
- 若桑みどり他編著(2006)『「ジェンダー」の危機を超える!』青弓社.
- Butler, Judith(1990)*GENDER TROUBLE: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge(=竹村和子訳(1999)『ジェンダー・トラブル』青土社).
- Scott, Joan Wallach(1999)*Gender and the Politics of History*. New York: Columbia University Press(=荻野美穂訳(2004)『ジェンダーと歴史学』平凡社).

❖ 투고일: 2014.12.30

❖ 심사완료일: 2015.02.08

❖ 게재확정일: 2015.02.09

Abstract

日本の「ジェンダー・バックラッシュ」勢力の言説とその特性
—性(性別・性の多様性)を中心に—

石橋

本論文は、1990年代後半以降、バックラッシュ派と言われている反フェミニズム側の保守運動の政治的な力と言説によって、ジェンダー論及びフェミニズムに対する歪曲・流言(フェミニズムの「害毒と悪玉視」)が拡大再生産されてきたことを明らかにし、その言説(1999~2006)の中でも性をめぐる主たる論点(主張)とその思想的特性について考察したものである。

具体的には、性(性別・性の多様性)をめぐる言説について、「男女二分法のイデオロギー」「同性愛者嫌悪」「女装家(オカマの授業)」「自己弁護論」「破壊・否定論」「男女平等との分離論」「女性蔑視・詭弁・ルサンチマン視」「陰謀論」というキーワードでまとめた。とくに重要な論点であるのは、男女二分法と「男らしさ・女らしさ」に代表される「本質主義」「生理的宿命」論に基づく固定的な性別役割分業と性別特性論であり、「性の多様性」を否定することで、性的マイノリティ、多様な家族と生き方に対する差別がその根底に潜んでいると分析した。

バックラッシュ言説には、各人の人権意識やジェンダー平等意識が欠如している主張が多かったにもかかわらず、こうした言説が一部で浸透してしまったのは何故か。ここでは、①とんでもない俗論であっても分かりやすい言葉で説明している点、②俗論であっても社会的通念に訴えかけたものである点(「秩序・規範」「伝統・文化」「家族・家庭」など)、③フェミニストは男女関係を敵対関係として捉えたと歪曲する論法、④「ジェンダーフリー」は「性差否定」であると決めつけた論法、⑤人々のエリート・知識人への反発を利用して「フェミニズム＝ルサンチマン」視を広げたこと、などを指摘した。

Key Words : ジェンダー、ジェンダーフリー、ジェンダー・バックラッシュ、性別役割分業、性別特性論、男女平等

Abstract

A Discourse on the Power of the “Gender Backlash” and its Character in Japan

-Focusing on Gender(Sex Distinction and Gender Variance)

Seok, Hyang

This paper sheds light on how from the 1990s onward the distortions of and rumors about gender studies and feminism (views about feminism being harmful and poisonous) produced by the discourse of the antifeminist conservative movement known as the backlash group expanded and reproduced. It studies the main points of discussion around the question of gender as well as its ideological characteristics in that discourse (1999–2006).

Specifically, this discourse about gender (sex distinction and gender variance) was arranged around the following key words and phrases: the ideology of the male–female dichotomy; homophobia; cross-dressers (lessons from gay men); theories of self-justification; theories of denial and destruction; gender equality and segregation; misogyny, feminist sophisms, and feminist resentment; and conspiracy theories. What is especially important are the issues of the differentiation of roles and special characterization of gender based on theories of “essentialism” and the “biological mission” as represented in the male–female dichotomy and “manliness–womanliness.” Because these deny gender variance, analysis was performed to determine how discrimination toward sexual minorities and diverse families and lifestyles hides in it.

Why is it that the discourse of backlash has partially penetrated even though the lack of awareness of individual human rights and gender equality has often been noted? That leads to identification of the next factors. First, although the discourse expresses gross and commonplace views, it explains them using easy-to-understand language. Second, it resorts to generally accepted ideas (“order and rule,” “tradition and culture,” “family and home,” etc.). Third, the distorted logic of saying that feminists think of the

relationship between men and women as a hostile relationship. Fourth, the assertion that “gender free” means “denial of sexual differentiation”; and fifth, the spreading of the view that identifies feminism with resentment, making use of the reaction against elites and intellectuals.

Key Words : gender, gender free, gender backlash, sexual differentiation of roles, special characterization of gender, gender equality